

美人論

——都會否定論の一——

都會否定などと、あたまから言ってしまったのでは、何のことかわからない。しかし、わからないのは、都會にいる人々のことで、田舎にいる人々は、じきに「なるほど」と胸にくる。

みやこ者じゃとお威張りなさる

田舎が無うてなにみやこ

今でもそうだが、都會人が田舎に出かける時、彼は一種の階級的誇りのような、そうでなくてもある安易さで、練り歩くのを常とする。反対に田舎者が都會に出る場合は、一種の恐怖心と、卑屈さとおずおずと歩く。

何故か？ 第一には容貌とか身装とかの關係からである。つまり「美」の關係からである。都會人は美で、田舎者は醜いとされている。

この美醜の問題は、普通には「なんだそんなこと問題にする価値があるか」と見くびら

十四内

れている。だが、こうした「見くびり」や「無視」の陰に、いかに多くの罪惡がそのまま隠されているか、不合理がそのまま見逃されているかということを、われわれは一応考えてみなければならないのである。

二

その前に一言いっておきたいことは、昔から文学その他を見ると、田舎者を笑う意味のものが非常に多い。それは丁度金持ちが貧乏人を笑うのと、全く同じ意味と態度とからである。都會人と田舎者との、こうした階級的対立は、当然両者の睨み合いとなるのを、どうすることもできない。そこでさつき書いたような歌などが、また他にもたくさん生まれた。

花のみやこと誰が名をつけた

みんなうちの汗の汗

マルクス主義の人々などは、都會と農村の対立は、主として資本主義時代の現象だというが、決してそうではない。両者の対立は、強権社会が始まつてからのことで、それが終らなければ、決してこの対立は、なくならないのである。

徳川時代の法律に、「町人と百姓とは婚姻を許さず」ということがある。そのわけは、百姓が町人の華美な生活を見て、「嫉妬」心や、「ムホン」心を起こしたりするようになるからだといふのである。

明治維新後、都会と農村との、そうした意識的な隔たりは除かれた。だが、そうであればあるほど、本質的な隔りが白日のもとに、はつきりと暴露されて、都会に対する田舎のいわゆる「嫉妬」、否、正しい階級的自覚がよび起こされた。

大正十二年の東京地方の大震災を中心として、ひとしきりこの問題が、論じられたことがある。それによると、各田舎は東京復興のために、食うや食わずの状態をも忍んで奉仕した。それに反して、田舎に天災が見舞つても（例えば熊本地方の大津波など）東京は顧みもしない。

強権社会では、すべてが都会本位である。現在見るような農村の窮状に対しても、政府は七千万円という金を、救済のために支出するというが、その金は農村そのものを救済するためでなく、都会の失業者を農村に誘い出すためであるというのだ。つまり彼等のおひさまとから失業者を追い出すことによつて、田舎をますます困らせるためである。

ブルジョアの学者達は、都会がよくなれば田舎もよくなるという。そこで都会を盛んに合理化し近代化するのである。だが、そうすればするほど、その費用は田舎から出るので、田舎は惨めな有様になる。

ロシアでも、都会の話はよく聞く。労働時間が七時間制であるとか、母子扶助の施設がどうか。だが田舎はどうか、田舎はあいかわらず帝政時代の惨めな状態のままで、七時間どころか二十時間も働いても、なお一向よくなる見込みはない。

都会が良くなれば田舎もよくなるというのは、強権社会の胡麻化しであり、夢である。

十四分

それは下度、殿様がよくなれば家来もよくなるといったような程度のことはあるにしても、それも殿様と家来とが、他の何者かを搾取している場合にのみ当てはまることである。例えば他の後進国とか、植民地とかを搾取している場合のことであるが、そういう経済的事情が、正しくないものである——即ち不安定なものであることはいうまでもないことだし、それに今後は絶対に望まれないことである。従つて都会がよくなればそれだけ田舎はわるくなる——ということが、今やはっきりと見きわめられねばならない。

わたし達はごく常識的に考える習慣をもたねばならない。常識の中にこそ真理はある。ブルジョア学者は、むずかしい学問によつて、愚民を胡麻化すすべを呑みこんでいる。が、わたし達は、そんな学者の学問よりも、愚民の間に生まれた無知な歌に、かえつて信ずべき哲理を発見することが多い。

三

こういう歌がある。

わたしや悲しい丹波の生まれ

髪の結いよで笑われた

またこんな歌もある。

いなにや珍らし美人じゃとても

町じゃ山出しおさんどん

最後の歌は、都会の婦人が、田舎の婦人を嘲つて歌つたものであるが、こういうひどい嘲り方は、今の都会人はしないだろうけれど、實際の上では、それだけの差別は、厳として存在している。即ち、田舎で美人といわれる者も、都会の者に比べると、醜いということとは、事実として認められている。こうした事実は——これは普通一般の婦人大衆にとつては、かなり切実な問題だが——何ゆえに生じてきたか。

わたしは今、この方面のことだけを、少し考えてみたいと思う。

四

美とは何ぞや——美とは何であるかということについては、従来では二つの方向から考えられている。その一つは哲学的に——例えばプラトンでは、美の本質を客観的實在、宇宙それ自身（即ち完全体）であると考えた。故に個々の美、即ち肉体における美は、本質美の不完全な反映にしか過ぎないとし、精神美を以て、より本質美——即ち美の真相——に近いものであるとした。ヘーゲルも美を客観的に見ている点で一致している。彼は、美は物象を通じて輝く觀念（宇宙の絶対的心意）であると考えている。シウベンハウエルは美に対する考え方は、例えば天然の美に対して、「宇宙意志が認識のない状態にあつて客観性を呈し、最もうぶに開展している」が故に美であるといっているのをもて、宇宙意志そのものを彼は美であるとしたことがわかる。芸術の表現する美は、即ちその真相（宇宙意志）に対する直観によつて得られているものであると彼は言った。

十五

以上に挙げた人々の美に対する考え方は、質においてはもちろん異なるものであるけれども、形において共通している。即ち美とは宇宙の絶対値であり、その個々の物象および事象に反映せるものであるというのである。（肉体の美は、精神の美を物語るものであるという、クリスチャンの美人観はこれに基づく）

これに対してカントは別種の形において考えた。カントは「美とは客体の性質を語るものではなく、人心におけるそれ自らの主観である」と考えた。即ち美を客観的の實在としてはず、主観的の「感じ」であるとしたが、この考え方は、近代美学のある意味における基礎となった。

實際、美的判断は主観において考えられねばならない場合が多い。ある人の感ずる美は、必ずしも他の人のそれではあり得ない。また同一人にしても、昨日の美必ずしも明日の美ではないことがある。

かくて美に対する解釈は、形而上学的の態度から心理学的のそれへと狭められ（もしくは深められ）てきた。（アバタもエクボという美人観は心理学的の美人観である）

ところで、こうした哲学的の考え方からでなく、それとは全く無關係にそして全く飛び離れた方面において、美とは何であるかということが考えられている。それは、生物学的にである。早く言えば生物の上に現われている美的現象に対する考察がこれである。という、誰人も直ちにダーウィンおよびウォードを意識するであろう。

ダーウィンは「雌雄淘汰」の章に、「ギアナの岩つぐみや、風鳥や又はその他の若干の

鳥類が集まつて、雄鳥はわかるがわる大念入りにそのはなばなしい羽毛をひろげて、雌鳥の前で奇妙な身振りを演ずる。雌鳥はしばらく見物していて、遂に最もその心を引く配偶者を選挙する」と言い、「ある動物が共通の同じ生活習慣をもつていてそしてその構造や色彩や、または装飾が違つてゐる時には、この相違は主として雌雄淘汰によつて生じたものである。詳しく言えば個々の雄が相続く幾世代の間、その武器や防禦手段やまたは容色等において何らかの小便宜を有し、それをその雄の子孫にのみ遺伝させたからである」——即ち生物に現われている美の現象は、雌雄淘汰によつて生じたものであると彼は言つてゐる。

ウオードはこれを一層深く考察している。彼によると、動物時代においては「男性開花」の現象が見られる。即ち男子において美的現象が著しい。(美人といへば女性であると考えられる今日の人間社会とは反対に)——これは何に因るかという、それらの動物時代にあつては、女性に種属の根幹として、男性同志の激烈なる競走の間に立つて、常に自若としてその成り行きに着目し、種族に有利なる男性を選挙することを怠らない。そしてそれが長い世代にわたつて続けられ、遂に男性開花の時代に到達する。即ち男性開花——美男の出現は、種属の利益を代表する女性によつてなされたものである。然るに動物時代から人間時代に入るに及んで、種々の關係から、男子支配の時代となり、ここに美人(女子における美)の出現を見ることになつた。ところで男子美と女子美との間には大きな相違点がある。男子は女子の美を追求することによつて女子の身体を弱小ならしめた。また、

才智とか勇氣等その他精神的の方向の発達を阻止した。さらに生殖力を弱め、不妊に傾かせた。女子支配の下における男子開花は、種属にとつて有利な結果を物語るものであるが、男子支配の下における女子開花は、種属にとつてはなほ不利の状態を示している。このままに進んでいったら種属は全滅する他はない。これがウオードの「女子中心説」における美の解釈である。即ち男子ならびに女子における美的現象は、相互の支配すなわち淘汰によつて惹起したものであるといふのである。

この相互の支配すなわち淘汰ということで、さらに考えられることは、少くとも美に関する限りにおいて、男子淘汰および女子淘汰と呼ばれているものは、ダーウインのいう単なる雌雄淘汰ではなく、むしろ彼の別の章において説いている自然淘汰と人為淘汰とに該当するものではなからうかといふことである。ダーウインは雌雄淘汰を自然淘汰の一部分として認めているが、真に自然淘汰として認めるべきは女子淘汰(女子は種属の意志と利益を代表する。そして種属は即ち自然である)であつて、男子淘汰はむしろ人為淘汰と見るべきである。自然淘汰と人為淘汰の相違についてはダーウインは「自然はただその保護する生物のためにのみ淘汰するが、人間はただ自己の利益のためにのみ淘汰する」といつている。即ち女子は男子を虐げるためには淘汰せず、それを成長せしめるために淘汰した(自然淘汰)、これに反して男子は自己の利益のために女子を淘汰した(人為淘汰)。

——また、さらにダーウインによると、「自然はあらゆる内的器官を進化せしめる。しかし人為は外形に変化を与えるにすぎない」といつているが、人類はアミイバから進化した

というそのアミープ時代から人類への長い進化過程は、取りも直さず女性淘汰の過程を物語っている。女性には常に種の進化的方向を選び、そしてそれを累積せしめ、その結果として今日あらしめている。例えば爬虫類から鳥類への進化に当って、女性のなめた苦心——もちろん意識的ではなくても——の大きく、そして細やかであつたことについては、ある学者が既に説いている。そこでは「飛ぶ」という能力を選択の対象とし、その優者を累積して行つたのである。ベネデン氏とやらの極めて滑稽な口調——しかし生物学的に言つて故のないことではない——に従えば、原始男性は睾丸であるというが、睾丸から今日見るような美男子へと進化せしめたのは主として女性淘汰である。そしてこれ即ちダーウインのいう自然淘汰の法則と性質を示すもので、内的および外的の一切の器官を「進化」せしめている。これに反して男性淘汰は、ダーウインのいう人為淘汰——即ち外形を「変化」せしめるにすぎないもので、例えば支那人はその女性の足を変形せしめたが、それが進化でなくして変化である所以は、それに対する人工的方法を廃止すると共に、復元することが可能であることによつて知られる。

かくていずれの意味においても女性淘汰は自然淘汰であり、男性淘汰は人為淘汰であるという結論に達する。従つてその人為淘汰による女性美なるものは不安定のもの、一定の方法的重圧が取り去られれば直ちに復たの恐れのあるものであるということがわかる。つまり女性美とは何か、人工的のものである。人工的の重圧と粉飾とによつて保持せられてゐるものである。例えば「女子の生命は化粧と着物である」という言葉が証明するように、

十下内

女子からそうした人工的努力とか粉飾を剥ぎ取つたならば、果して真に美であるかどうかは怪しいものとなる。

五

そこで私は今日の女性の美は、哲学的、もしくは生物学的の尺度を以て解釈すべきではなく、社会学的もしくは経済学的に証明せらるべきを至当とすると考えるものである。何となれば、女子の美は哲学者のいう形而上学的もしくは心理学的のものであるよりは、また生物学者のいう雌雄淘汰のものであるよりは、むしろ一定の方法的重圧——即ち男子支配の社会制度的の産物であり、同時に経済的の基礎的条件を母胎とする遊戯的現象として考えられるからである。

六

女子の美が男子支配の社会制度的の産物であると認める場合にあつては、女子の美はその社会に対する肉体的精神的屈従によつて価値づけられる。例えば身体の弱小であることや内気と称せられる奴隷的精神を以て（内気がある複雑な沈黙する精神を意味する場合）はそれと違ふ）あたかもそれが女子の美の主な要素であると考へられたりする。取りも直さず現有の社会制度に対する肉体的精神的の屈従の状態である。これに少しでも社会制度に反抗するかなのような一群の女子——例えばかつての「新しき女」などに対しては、そ

これらの女子のすべてが醜であると考えられる。容貌でも、態度でも、即ち肉体的にも精神的にも醜であると考えられる。今日ではモダンガールに対して、「毛断蛙」などと、蛙と共通の醜を、そこに想起したりする。しかし、今日のモダンガールよりも、既往の「新しき女」に一層の醜が感じられたが、その理由として、彼女達は現代のモダンガールに比べて「理屈」を多く言つた、即ち自覚的であつたということが第一に考えられる。それに比べると現在のモダンガールは知的であるとは言つてもそれは何等社会に關連する意味のものではなく、むしろ媚態の一種で、社会的にいつて妨げになるものではない。ここに今日のモダンガールの、かつての新しき女よりも美であるとされる一つの理由が置かれる。

(新しき女と關係するような男の顔が見たいなどと、ある有名な文士までがいつたことがある。彼等は新しき女というと直ちに醜婦ということを連想した)

また女子の美を、経済的基礎的条件を母胎とする遊戲的現象として認める場合にあつては、前に引いた歌「田舎には珍しい美人」という言葉によつて知られる田舎には美人が少く都会に多いということを考へてみる必要がある。何故に田舎には美人が少く、都会にそれが多いか。私がいおうとしている美と都会との關係の問題が、すなわちこれである。

七

何故に田舎には美人が少く、都会にはそれが多いか。それには二様の答へが得られる。即ち田舎に美人が少いわけではなく、その証拠には田舎の女子が二年も都会に出ていれば、

たちまち美人になる場合が多い。これは即ち美人なるものは、化粧と着物とで出来ているということ物語るものであり、田舎は労働の場所、それらの化粧とか着物とかには縁が遠い。即ち故に田舎の女子は醜である。それに反して都会は非労働、有閑、享樂の場所、化粧や着物の競争地である。故に都会の女子は美である。これが一つの答へである。他の答へは、ダーヴィンの「人為淘汰に便宜な諸事情」の中から得られる。即ち「高度の變化性と、数の集積、並びに土地の封鎖」——そして高度の變化性は生活狀態の變化の度の高いに因るというが、都会の生活狀態は變化に富んでおり、従つて少くとも美に關して間斷なき變化性、あるいは種々の発芽とその進展とがたえず助長される。また美における数の集積、即ち都会にあつては女子は美によつて集中されている。すべての女子は美を求める。競争する。即ちそれは美的淘汰に便宜な事情の一つである。また土地の封鎖ということ、一つの区画をなせる城壁の中においてのみ、人為的の美は成育する。箱庭の中に箱庭的の美があるように、都会の中には都会美がある。そして今日美と稱されているものは、この都会美に他ならない。かくていづれの意味においても、今日の女子美は都会のものであるということが考えられる。即ち美という一点において、田舎の女子は都会の女子に支配されている。

ところがそれと同じ意味のもとに、次のようなことが考えられる。貴婦人という言葉は「あでびと」とも読むことによつてそれが美女を語るものであることが分かるが、それに反して百姓女とか下女とか貧乏人の嬬などと呼ばれるに至つては、直ちに醜婦が連想さ

れる。これは何故であるか。取りも直さず今日の美は富の上に築かれるものであることを意味する。即ち今日の女子美においては、都会の女が田舎の女を支配しているのと同時に、富家の女が貧家の女を支配している。

然して、それは一括して、今日の女子美は富によつて生まれ、また富によつて支配されているものであるということが言える。都会もまた、富の集積の場所であるからである。そしてそれは「蓄積」もしくは「集中」という不具的経済事情を母胎とするものであるが故に、おのずから不具美である。というのは、例えば服装を見ても、今日最高の美とされる服装——そしてすべての服装（女子）を支配しているそれは、遊戯的服装——即ち非労働にして有閑の婦人の境遇を基礎とするものであり、労働婦人の境遇とは、いかなる意味においても矛盾するものである。即ち今日の女子美は、不具的経済事情を母胎とする遊戯的現象であり、経済事情が平均を保ち、そして社会的に安定する場合に於ては、今日の女子美はいうまでもなく消滅し、然してそこには再び哲学的、あるいは生物学的、並びに社会学的の意味における別種の美が出現することになるかも知れないが、そして現在その発芽の認められることがないとは言われないかも知れないが、それはここでは別のことである。

要するに今日の女子美は、かつての形而上美あるいは男子美の如く、哲学的、生物学的の尺度を以て解釈すべきではなく、社会学的あるいは経済学的のそれを以て証明すべきであるということ、ここでは問題としたのである。もつとも社会学的には、不十分では

十七

あつてもウォードも触れている。特に今日注意すべきは経済的方向におけるその解釈であり、またその場合にのみ、今日の女子美をより正當に考察することが可能であることを私は信じた。しかも経済的方向とひとくちにいっても、意味は多様である。わたしのいうのは、徹底的の生産制度の改革——即ち都会的田舎の産業の分離の廃止（ひとくちに言つて都会の廃止）を中心とするものでなくてはならない。

※ 都会の廃止は、二様の現象によつて、推理することができる。その一つは都会からの崩壊現象である。他の一つは田舎からの抬頭現象である。都会からの崩壊現象としては、文化および産業の分散等その他指摘することができるが、国際的には既に殆んどそれは事実として現われてきている。世界における工業国（都会国）と農業国（田舎国）との分業的対立はイギリスの盛衰を中心として、また大戦後におけるアメリカ金融資本の輸出を動機として、殆んど一掃された。またそれとある事実が認められる。即ち、ある経済学者達の説のように、資本蓄積の無限の進行を仮りに可能とするも、資本の普及に伴うある程度までの都会崩壊の事実は、これを認めなければならなくなるであらう。だが、それと同時に、田舎からの抬頭現象こそ、新社会の中心たるべきものとして、注目されねばならない。その第一は思想的の抬頭（都会否定の）第二には種々の政治的経済的必然における事情の展開であらう。ブルジョアやマルクス主義学者は都会からの崩壊の現象に沿うてのみ思索するが、われわれは二様の現象をあわせて認識し、客観する

ことによつて、特に田舎からの抬頭現象を運動の中心とするものである。